

## モウラナ・バシャニ覚え書き

— バングラデシュ政治研究 1 —

萱野智篤

## 目次

- I. はじめに
- II. 人と思想をめぐって— 6つの視点
  - 1. 「巡礼」の行方
  - 2. 農民の子として
  - 3. イスラム社会主義
  - 4. コミュナルか、ノン・コミュナルか
  - 5. 非暴力について
  - 6. 多面性と統一
- III. 二つの独立とバシャニ
  - 1. 植民地インドで
  - 2. インド・パキスタン分離独立
  - 3. パキスタン時代
    - (1)アワミムスリム連盟結成
    - (2)統一戦線の勝利と21項目要求
    - (3)アワミ連盟分裂— 2つのナショナルリズム
    - (4)アユーブ・カーン軍事政権
    - (5)6項目綱領
  - 4. バングラデシュ独立
  - 5. 独立の後で
- IV. バシャニとイスラム
  - バシャニのラブビヤート
- V. 結びにかえて— ラジカルな民主主義者としてのモウラナ・バシャニ

## I. はじめに

モウラナ・アブドゥル・ハミッド・カーン・バシャニは、1880年に英植民地統治下のベンガル州パブナ県（現在のバングラデシュ、ジ

ラジゴンジ県）に生まれ、1976年に96歳でその生涯を終わるまで、インド亜大陸の激動期に60年を越える政治生活を送った。

同時代のインド亜大陸における政治家には、ガンジー（1869—1948）、ジンナー（1876—1948）、ネルー（1889—1964）らがあり。ベンガル政治史上の同時代人としては、フォズルル・ハク（1873—1962）、スフラワルディー（1893—1964）らがいる。

バシャニは、その前半生における反英植民地運動から、60歳を越えて迎えた1947年のインド・パキスタン分離独立、そしてさらに齡90を越えて迎えた1971年のバングラデシュ独立にいたるまで、常にこれらの運動の中で、大衆運動の組織者として、また野党勢力のリーダーとして重要な役割を果たした。

しかしながら、モウラナ・バシャニの歴史的な評価は、国によりまた論者により、分かれる。インド現代史においてはコミュナルな政治家との位置づけが行われる<sup>(1)</sup>一方で、バングラデシュにおいてはその世俗性が強調される。バングラデシュの独立をパキスタンという政体の統合の失敗と捉える立場からは、バシャニが果たした役割が終始否定的に捉えられる<sup>(2)</sup>のに対し、バングラデシュ独立史においては、その独立の主張の先駆性が評価される。さらに、バングラデシュ国内においても、その歴史的評価は一定しているとは言えない。モウラナ・バシャニは、論争の対象なのである。

90年を越えるバシャニの生涯を振り返り、

それぞれの政治状況におけるその発言と活動の軌跡をたどってみると、われわれはバシャニが、現代インド亜大陸の政治のみならず、現代の国際政治に関わる、いくつかの重要な問題を提起していることに気がつく。

冷戦後、世界各地で宗教・民族を軸にした対立が暴力的な展開を見せている中で、歴史的に見れば、1947年のインド・パキスタン分離独立と1971年のバングラデシュのパキスタンからの独立は、20世紀世界における、宗教と民族を軸にした分離・独立の先駆とも言える。モウラナ・バシャニが、この激動の中で果たした役割を検証することは、20世紀世界における宗教・民族対立の提起する問題を、一人の政治家を通して検討することでもある。

また、「文明の衝突」論にもみられる通り、現在の国際政治においては、イスラム世界を一枚岩として捉え、西欧文明とは相容れないものとする見方が一般化している。しかしながら、現実のイスラム世界は決して一枚岩ではなく、多様性に満ちている。モウラナ（イスラム教の知識人）の称号を持つ、宗教指導者としてのバシャニの政治との関わりのあり方を明らかにすることは、イスラム世界の政治の多様性についての私たちの認識を広げ、その理解をより歴史的、内在的なものにしていく一助となるだろう。モウラナ・バシャニは、決して単なる歴史的遺物として安易に片づけることのできない人物なのである。

この小論は、以上のような関心に基づいて、モウラナ・バシャニの生涯と思想を検討して、現代のインド亜大陸特にバングラデシュの政治を歴史的な視点から考察する作業の一環とすることを目的とする<sup>(3)</sup>。

以下の論述では、まず第1章でバシャニの人と思想を検討するための6つの視点を設定し、問題提起を行う。第2章では、現実の政治史上の様々な局面においてバシャニが果たした役割を系時的に整理し、第1章で提起した問題を検討する手がかりを探る。第3章で

は、モウラナとしてのバシャニの思想を理解する上で核心的な重要性を持つ、イスラムとバシャニの関係を、ラビヤートの思想を中心にして検討する。第4章では、以上のような考察の中から新たに浮かび上がってきた問題点を整理した上で、モウラナ・バシャニをラジカルな民主主義者として捉え直す仮説を提示する。また、参考資料として、モウラナ・バシャニに関する年譜を末尾に付す。

今回の検討作業の対象とした資料は、日本国内及びバングラデシュで収集した邦文・英文の資料と、1999年3月にバングラデシュでバシャニの関係者に対して行ったインタビューと調査によって得られた資料に限る。ベンガル語文献の分析と、より多くの資料と関係者の調査は、今後の課題とする。

## II. 人と思想をめぐって—6つの視点

モウラナ・バシャニの肖像は、その服装を含めて、一貫した特徴を持っている。椰子の実の繊維で編んだ簡素なムスリム帽、イスラム教の指導者に特徴的な白く長い髭。ひざ上までゆったりと包む白のパンジャビ（襟無し）の長袖上衣）を身にまとい、その下は縞模様のルンギ（腰布）を身につけている。バシャニの特徴である強い光を放つ大きな目と頑強な意志を表す大きな鼻を除けば、この格好は、ベンガルの農村に住む年配のイスラム教徒の外見と寸分違わない。バシャニのこのような外見は、その「信じがたいほど簡素」なライフスタイルとともに、その生涯を一貫する特徴である。

### 1. 「巡礼」の行方

ガンジーを含め、インド・パキスタンの独立に関わった同時代の政治家の多くが、ベネディクト・アンダーソンの指摘する、宗主国への「巡礼」の経験者だったのに対し、バシャニの場合は、「巡礼」の行き先と目的が異なっていた。バシャニはその青年時代に、インド北部のデーオバンド神学校に学んでいる。

この神学校は1857年のインド大反乱の後に、ムスリムの伝統派による革新運動の中から生まれた教育機関である。他方のムスリム近代派による革新運動が、北インドのアリーガルカレッジにおける西欧文明の教育に向かったのに対し、デーオバンドでは、伝統的イスラム法とムスリムの日常生活の一致を目指す教育が行われた。この神学校には当時、イスラム法を学び、民衆へ伝えることを目的として、北西部を中心としたインド各地から学生たちが集まっていた<sup>(6)</sup>。ここデーオバンドにおいて、バシャニは、ベンガル以外の様々な地域の出身でありながら、ムスリムとしての信仰を共有する仲間と出会い、共通の経験を積み重ねていった。

また、この神学校は、イスラム宗教指導者による民族運動の中心地でもあった。近代派のアリーガルカレッジにおける革新運動が、政治的には全インドムスリム連盟という政党を生みながら、英植民地支配を認めた上でムスリム上流階級の利益を擁護する立場に立ったのに対し、デーオバンド派の指導者たちの目は、当時の西アジア・北アフリカのムスリム諸国に対する英帝国主義の侵略とそれに対するアラブ・トルコ・イランの民族運動に向けられていた<sup>(7)</sup>。彼らにとって、英植民地政府は、これらムスリムの民族運動に対する共通の敵であり、植民地インドは、これらの運動と国際的に連帯して繰り広げられる闘争によって開放されるべきであった<sup>(8)</sup>。バシャニの反植民地主義の基本的な骨格には、デーオバンドに当時生まれつつあったこのような原初的な「想像の共同体」が大きな影響を持っていたと考えられる。

ベネディクト・アンダーソンにしたがって、国民国家を「想像の政治共同体」として考えるならば、20世紀インド亜大陸におけるインド・パキスタンの分離独立と、バングラデシュの独立という激動は、複数の異なる原初的な「想像の共同体」が生み出され、相互に影響

を与え合いながら、相克し、分離する過程として捉え直すことも可能であろう。この過程の中にバシャニを位置づけること、これが第1の課題である。

## 2. 農民の子として

冒頭に挙げた5名の同時代の政治家たちとバシャニを隔てるもう一つの大きな違いは、その出身階層である。ガンジーをはじめ、全員が政治家、あるいは弁護士の子の出身であるのに対し、一人バシャニは、農民の子であった。ベンガル州バプナ県ダンガラ村の中農の家に生まれたバシャニは、ベンガル農民の日常的な生存への闘いの中で育った。バシャニは、他の同時代の政治家たちが少年期・青年期に受けたような家庭教師や近代的学校制度の下での教育は受けていない。彼は伝統的なムスリム教育体系の中で学び、さらに、デーオバンドで学ぶ幸運に恵まれた。

このような出身背景は、バシャニの時代から今日に至るまで、インド亜大陸の政治家の多くが都市に基盤を置く中産階級の出身であることと比べると、ひととき異彩を放っている。国民的な政治家として活発な活動を繰り広げるようになってからも、彼は、ダッカの北西120kmほどのタンガイル県サントシュ村にある、藁葺きの家に住み続け、その他の不動産としては礼拝を行う小さな建物があるのみだった<sup>(9)</sup>。彼は、都市生活の奢侈からは、終生無縁だった。このような出身背景とライフスタイルは、彼の政治家としてのヴィジョンと直接結びついていた。

バシャニの出身階層とその生き方の特徴を念頭に置くと、政治家としてのバシャニの活動を振り返ることは、この地域の人口の大半を占める農民の利害とその将来が、20世紀インド亜大陸の激動の中で、いかにして代表されるあるいは拒否されたのかを、振り返ることもつながる。また、バシャニがその生涯を通じて政権の外に立って、野党の立場からこの課題に取り組んだことを考え合わせると、

この作業は、バングラデシュ政治における野党のあり方を考える一つの手がかりにもなる。インド・パキスタン分離独立とバングラデシュ独立という2つの独立—新たな政治社会の形成—に向かう動きの中で、モウラナ・バシャニは、代表されない人々の利害を、いかにして政治的課題として示そうとしたか、これを探ることが第2の課題である。

### 3. イスラム社会主義

人民主義者、被抑圧者の味方、左翼の長老、大衆運動の触発者等々様々な形容がバシャニに与えられる中で、特に注意を要するのは、イスラム社会主義者としてのバシャニである。

現実政治において、バシャニは野党勢力の中でも常に左翼の陣営にいた。1957年のアワミ連盟からのNAP(全国アワミ党)の分離、さらに1967年にNAPがソ連派と、中国派に分裂したときにもバシャニはその一方のリーダーであった。1967年以降NAPは、ソ連よりのモザファール派と中国よりのバシャニ派に分かれ、それぞれの指導者の名前で区別がされるようになる。モウラナ(イスラムの知識人)としてのバシャニと左翼の同行は彼の死まで続いた。

しかし、この二人同行は必ずしも常に平穏なものとは限らなかった。1972年10月、バングラデシュ独立後の野党勢力の分裂状態を愁うる左翼紙の社説は、モウラナ・バシャニのイスラム社会主義の主張が、コミユナルな緊張を高めて左翼の団結を妨げていると論じ、「農民の生活向上への献身にもかかわらず、彼は、あのユートピア社会主義者のように、搾取のメカニズムについての理解が本物とは言えない、そのため社会変革についてののかれの思想は曖昧模糊としている<sup>(10)</sup>。」と批判を浴びせた。また、生前のバシャニを知る人物の1人は、「彼は、おそらくマルクスを読んだことはなかっただろう。」と語っている。このような記録や証言自体が、一般的な左翼のリーダーとしての人物像をもってバシャニを

裁断することの不適切さを暗示している。彼が主張したイスラム社会主義を理解するにあたって、同様の注意が必要となるだろう。

イスラム社会主義とは、一般的にはイスラム本源主義に立つ現代社会批判の1つであるが、多様な現われ方がある。そこで共通しているのは、社会的均衡の確立と維持であり、社会正義の基礎をイスラムに求めることであるとされる。バシャニの主張するイスラム社会主義にもこれらの特徴は共通していたと考えられる。しかしながら、それは、バシャニのイスラム信仰とどのような結びつきを持っていたのだろうか。

バシャニにおけるイスラムと社会主義の関係を考えることは、少し視野を広げてみれば、バングラデシュにおける政治とイスラムの関係の具体的な1つのケースを検討することでもある。そして、この作業は、バシャニ亡き後のバングラデシュ政治においては、政権が、イスラム勢力を支持基盤に取り込むという極めて世俗的な意図を持ってイスラム教を国教化する一方で、草の根レベルでは原理主義者による既得権益の擁護という形でイスラムと政治が結び付いていることを考えるとき、バングラデシュにおけるイスラムと政治の関係を新鮮な目で見直す手がかりを与えてくれるのではないだろうか。バシャニの内面におけるイスラムと社会主義の結合の背景を探り、具体的な政治状況に即して、バシャニにおけるイスラム社会主義の主張の意味内容を検討してみる。これが第3の課題である。

### 4. コミュナルか、ノン・コミュナルか

20世紀のインド亜大陸の政治においては、政治と宗教の関係が、致命的な重要性を持っている。インド・パキスタン分離独立の際に発生した大規模な暴動や、90年代に入ってアディヤのモスク襲撃事件に引き続いて起こった暴動をはじめとして、20世紀のインド亜大陸では、宗教が政治との相互作用の中で、社会に血で血を洗う紛争を生み、政治共同体の

統合と分離を左右してきた。政治がどのような形で宗教と関わるかは、政治が社会の中に存在する潜在的な爆発物をどう取り扱うかという問題としても考えられる。

宗教的アイデンティティを、自派に有利になるように動員し利用しようとする政治手法をコミュニナリズムとし、そのような手法を取る政治家をコミユナルな政治家とするならば、バシャニは、はたして、コミユナルな政治家だったといえるのか。バシャニのこの点の評価をめぐるのは、「彼は、その活動期を通じて純粋な農村人民主義（ポピュリズム）と、宗派的（コミユナル）な訴えを結び付けようとした人物であった<sup>(13)</sup>」としてコミユナルな側面を指摘する研究がある一方で、その運動の非宗派的（ノンコミユナル）な側面に着目する研究もある<sup>(14)</sup>。

インド亜大陸においては、13世紀からイスラム教徒とヒンドゥー教徒が混在しており、一般民衆レベルで両教徒は平和的共存を続けてきた。コミュニナリズムは、あくまでも18世紀以降のイギリスによる植民地統治の過程で政治的に形成されたものである<sup>(15)</sup>。1906年のムスリム連盟の成立から、1947年のインド・パキスタン分離独立に至る20世紀前半のインド亜大陸の歴史は、まさにこの歴史的形成物としてのコミュニナリズムが、人々を突き動かし、一つの頂点に達した時代であった。この大きな歴史的波動のなかにいたバシャニは、インド亜大陸という共通の大地におけるヒンドゥーとムスリムの共存、さらにパキスタンそしてバングラデシュという新しい国家における両教徒の共存をどのように構想していたのか。これを彼の活動と発言の中に探るのが第4の課題である。

##### 5. 非暴力について

バシャニに与えられた様々な形容の一つに「暴力の預言者」というものがある。バシャニの生涯には、反英植民地テロ活動に関わった一時期があるといわれる。また、彼は、バ

ングラデシュの独立を導いた内戦の開始以前に、いち早く独立武装闘争の準備を主張し始める。また、それ以外の時における彼の政治的発言を見ても、しばしば要求の決意の固さを示すのに、「立憲的な手段以外による行動」の用意を示唆する場合があった。これらの発言の際にバシャニは実際に「立憲的な手段以外による行動」の用意をしていたのであろうか、それともこれは、みずからの主張を強めるためのレトリックの一種なのであろうか。また、このような「暴力の預言者」としてのバシャニ像がある一方で、大衆行動や政治活動の中で、明確に暴力を否定し非暴力的行動を呼びかけ、政治テロを厳しく批判するバシャニの姿がある。

バングラデシュに限らず、インド亜大陸においては、バシャニの時代から現在にいたるまで、政治における暴力が大きな問題である。政治家やその支持者に対する、反対派による暴力。そして他方における、より大きな組織化された暴力としての軍隊の統制。これらはいずれも、政治がいかにして紛争解決・秩序形成の直接的な手段としての暴力をみずからの支配の下に置き、説得と合意を基本とする人間活動としての政治を回復させるかという重大な課題に関連している。バングラデシュにおいても、独立に当たっての、武力闘争の経験が国民的経験として語り継がれる反面で、現在もバングラデシュの政治は、暴力をいかに調教するかという大きな課題を依然として抱えている。

「暴力の預言者」と呼ばれるバシャニのある側面と、他方での非暴力の主張者としてのバシャニを検証し、その内面における暴力と政治の関係を明らかにして、バシャニにおける暴力の調教のあり方を照らし出すこと。これが第5の課題である。

##### 6. 多面性と統一

モウラナ・バシャニの人と思想は、その肖像の外見とは裏腹に、多様な側面を持って

る。

農民出身の希有な政治家であり、イスラムの知識人にして社会主義者、ムスリム農民の利益を主張しつつ多様な信仰の共存を擁護する、また「暴力の預言者」と呼ばれながら、政治における暴力を否定した。さらに、バシャニは、次代の世界を担う人々を養成する教育機関の設立にも、その政治活動の傍ら、終生力を注いだ。<sup>(16)</sup>

バシャニの人と思想におけるこれらの多様な側面は、時にその支持者をも戸惑わせるものだった。左翼の内部からは、バシャニには政治的にゆきづまったときにイスラムを強調する「サイクル」があるという批判も向けられた。<sup>(17)</sup>しかし他方では、バシャニがその60年以上にわたる政治生活において、一貫して社会の中の最も抑圧され代表されないものに目を注ぎ、その要求を政治的課題として取り上げることに情熱を傾けつづけたことは、広く認められている。

第6の課題は、このようなバシャニの多様な側面を、第1から第5までの課題における分析軸を支柱として一人の人間の貫いた思想と行動の軌跡として捉え直すことである。このような見通しを持って、以下の各章では、バシャニの生涯の中に以上の5つの課題を検討する手がかりを探る。

### Ⅲ. 二つの独立とバシャニ

バシャニが政治家として生きた時代は20世紀のほぼ4分の3にわたる。ここでは、バシャニもそれに重要な関わりを持った政治史上の二つの大きなできごと、1947年のインド・パキスタン分離独立と、1971年のバングラデシュ独立を2つの区切りとして、その前後を含めて彼の生涯を5つの時代に分け、それぞれの時代のバシャニの足跡をたどり、前章で提示した5つの課題を検討する手がかりを探ってみたい。

#### 1. 植民地インドで

バシャニの出身地のベンガル地方は、インド亜大陸の中でも、最も早くイギリスによる植民地化がすすみ、それが内包する矛盾も、またもっとも先鋭に現れた地域である。

1793年、ザミンダリー制度の導入によって、地主の近代的土地所有権が認められた一方で、旧来耕作農民が保持していた土地に対する一定の権利や、領主や地主との安定的な関係は喪われた。また、土地が投機対象となることによって、農業に基盤を持たない商人や高利貸の地主が生まれた。19世紀後半に輸出用商品作物の栽培が盛んになると、土地所有権の移動はさらに激しさを増し、土地を所有する不在地主や富裕な農民と、土地を失って小作となり、さらに土地を持たない農業労働者に転落していく貧しい農民との分化が進んだ。

貧農への転落に宗教の差別はなかったが、イギリスによる植民地支配によって旧支配層の地位を奪われたものがおもにムスリムであり、商品経済の浸透の中で財力を貯えたものにヒンドゥーが多かったために、もともとムスリム人口が多数を占めていたベンガル地方では、少数のヒンドゥー地主が多数のムスリム農民を支配するという形で、農村の階級関係に宗教の違いが対応するようになった。<sup>(18)</sup>

このような社会的背景の中で、ムガル朝末期に生まれたイスラム改革思想であるシャー・ワリウッラーの<sup>(19)</sup>思想は、理論から実践への飛躍を遂げ、社会改革の思想として、そしてさらに反英抵抗の運動に発展していった。バシャニがこの世に生を享ける半世紀あまり前、19世紀の前半から中頃にかけてのベンガル地方には、2つのムスリムの宗教・社会改革運動が発展していた。西ベンガルを中心としたタリーカーエ・ムハンマディー運動と、東ベンガルのファライジー運動である。

このうち後者のファライジー運動の創始者シャリアットウラはムスリム民衆の宗教生活

の純化・厳格化を強調することにより、結果的にベンガルが「異教徒権力との闘いの地」となっていることを民衆に自覚させ抵抗意識を植え付けた。さらに、その子ムハンマド・ムフシヌッディン（通称ドウドウ・ミヤン）は、「神のまえにおいて人間は平等である、土地は神のものであるから地主の独占は許されない」と説いた。1840年代から運動は激しさを増し、地主への襲撃事件が頻発した。イスラム社会主義を唱えるバシャニの誕生以前に、ベンガルの歴史の中では、これらの宗教・社会改革の動きが先行していた。バシャニの思想と行動を検討するに当たっても、植民地ベンガルにおけるイスラム改革運動の中から生まれた、これらの改革・抵抗運動の伝統を念頭に置く必要がある。

バシャニ自身が抵抗者として歴史に現れてくるのは、20世紀に入ってからの反英抵抗運動である。中でも第1次大戦後に展開され、ガンジーも参加してヒンドゥーとムスリムが連帯して繰り広げられた大衆運動としてのキラファト運動に関わっている。しかし、運動の挫折をきっかけとして、バシャニはベンガルとアッサムの農村に基盤を置いた活動に移行する。1930年代のバシャニは、ベンガルとアッサムでの農民大衆運動の指導者として知られ、1932年には、植民地当局によってマイメンシン県からの追放処分を受けている。

マイメンシン県からの追放処分後、バシャニの主な活動地は、アッサム州に移る。当時アッサム州にはベンガル州、特にマイメンシン県出身の農民が多数移住しており、そこでは、移民の土地保有を制限するライン・システムと呼ばれる不平等な制度が存在していた。バシャニの活動目標はこのライン・システムの撤廃に向けられた。1937年には、全インド・ムスリム連盟のジンナーらに要請され、連盟に加入しアッサム州の代表を務める。しかし、分離・独立直前の1947年5月7日からは、連盟中央の承認を待たずに、ライン・システム

の撤廃を求めて、非暴力・非宗派（Non-violent, Non-Communal）を掲げた市民的不服従運動（Civil Disobedience Movement）を展開するに至る。<sup>(21)</sup>

## 2. インド・パキスタン分離独立

英植民地インドが、1947年にインドとパキスタンという2つの主権国家に分裂して独立するに至る道は、1906年の全インド・ムスリム連盟の成立から常に一定の方向性を持って追求されていたわけではない。

1930年のムスリム連盟アラハバード大会におけるムスリム国家の構想も、全インド的な枠組みについては語っておらず、これが分離独立の理論的基盤となっているわけではない。連盟内において、ムスリム独立国家が明確に追求されるようになったのは、1940年のラホール決議が最初である。インドが、ヒンドゥーとムスリムの二つの民族で構成されるとする、ジンナーの二民族論を受け入れて採択されたこの決議は、しかしながらムスリムによる単一の独立国家を追求しているわけではない。ラホール決議において認められたのは、インドの北西部と東部のようにムスリムが多数を占めるところに、「独立の諸国家」を作りその構成単位は自治権と主権を持つものとするというものであった。しかも、「独立の諸国家」は複数形で語られるのみで、その具体的数や地域については触れられていない。このラホール決議は、後に東パキスタンが独立してバングラデシュという独立国家を生む根拠となる。

連盟決議としてパキスタンが単一独立主権国家として語られるのは、分離独立のわずか1年前1946年4月のデリー決議であるが、これも連盟中央・州議会議員総会での決議として採択されたもので、ラホール決議との関係については何も語っていない。パキスタンは、国家構想におけるこのような曖昧さをもったまま独立したのである。

パキスタンはまた、宗教としてのイスラム

と国家の関係についても曖昧なまま、独立した。確かに、パキスタンというスローガンは、それを主張するものによって宗教的意味を込めて呼ばれることが少なくなかったが、連盟は、イスラムと国家の関係についての公式見解を出すのを意図的に避けつづけた。それは、建国運動にイスラムの広範な階層・勢力を結集するために取られた方策であったが、デーオバンドに代表される伝統的宗教指導者は、これを非イスラム的な世俗的エリートの政治組織とみなし、パキスタン建国に反対した。彼らの一部が、建国後の指導性の確保をねらってジャミーアトゥル・ウラマーエ・イスラームを組織し、イスラム連盟に結びつくのはようやく1945年のことである。

これらの事実を念頭に置くと、伝統的宗教指導者の1人としてのバジャニが、1937年という早い時期からイスラム連盟に加入したのは、デーオバンド出身の他の指導者たちのイスラム連盟への批判的態度と比べると特徴的である。また、分離独立時に、アッサム県シレットのパキスタンへの帰属をめぐって争われた直接投票においては、当時アッサム県イスラム連盟の総裁だったバジャニは、イスラム伝統主義の立場からパキスタンへの帰属に反対するモウラナ・マダニらのデーオバンド派の指導者に対抗し、ダッカ大学の学生有志の協力を得て、シレットをパキスタンに帰属させるのに成功する。これらの事実を考え合わせると、バジャニの場合にはイスラム伝統主義者がイスラム国家の指導という動機からパキスタン運動に結びついたのとは別種の動機が存在したと考えるべきであろう。1920年代のキラーフット運動挫折後の、ベンガル・アッサムでの農民運動の経験、これがバジャニにおける独特なパキスタン運動への関わりを特徴づける基盤となっていると考えられる。バジャニにとってパキスタンとは、「農民のユートピア<sup>(22)</sup>」として期待されたものだったのではないだろうか。

分離独立後、ベンガルに戻ったバジャニは東パキスタン議会選挙に北タンガイル選挙区から、無投票で選出される。しかし、3ヶ月後にはイスラム連盟政府を批判し辞任した。

### 3. パキスタン時代

1947年8月15日、パキスタンは、その国家構想の基本的な枠組みのいくつかの点—連邦を構成する単位の数とその権限や、宗教と国家の関係—について、曖昧さを残したまま独立した。これは、刻々と迫る権力委譲の時を前にして、インドから独立したイスラムの政治共同体を何とかして作り出さねばならないという現実の政治的要請のために、潜在的な論争を呼ぶ争点を先延ばしにした結果とも言えよう。独立後のパキスタンの政治は、この先延ばしにされた争点を含めて、建国に関わった指導者たちが軽視していた争点が次々と浮上し、それが多様な共同体の構想と絡み合っ、争われていく過程と見ることができる。この国家構想をめぐる争いの跡は、具体的には、建国8年目にして、ようやく制定され施行されるにいたった憲法制定過程の中に見ることができる。

独立後のパキスタンにおいては、多様な言語を母語とする多民族が、イスラムであることを唯一の絆として、1つの国を形成していた。しかしながら、建国の指導者たちは、このような言語や文化の多様性に十分な考慮を与えていたとは言い難い。1948年3月、独立の父ジンナーのダッカ訪問を前に、東ベンガルでは、ベンガル語を国語とすることを求める学生の運動が組織された。しかし、ジンナーは、明確に学生の要求を拒否し、パキスタンの国語はウルドゥー語のみとする—国家—言語の立場を明確にした。

言語の問題は、独立後の東ベンガル住民が新国家に対して抱き始めた不満を象徴するものでもあった。人口としては新国家の多数派を占めながら、警察・軍隊・官僚機構を西パキスタン出身者に占められ、自分たちの母語



が公的な場では認められない疎外状況に東ベンガル住民は置かれていた。1948年2月の制憲議会では、早くも東ベンガル州出身議員が「東パキスタン住民の中に、自分たちは無視され、西パキスタンの植民地として扱われているという気持ちが強まっている。」と発言していた。東ベンガルにおいて、パキスタンで最初の野党が形成された背景には、独立後の東パキスタンが置かれたこのような不平等な状況がある。

#### (1)アワミムスリム連盟結成

バジャニは、この野党結成の動きの中心にいた。1949年6月、ムスリム連盟内の反主流派はバジャニを総裁としてアワミ（人民）ムスリム連盟を組織する。設立決議の中には、政府に対する要求として、総選挙の即時実施、政治犯の釈放などと並んで、ベンガル語国語化と、ザミンダール制の廃止・ジュート産業国有化などの社会・経済的改革の要求が盛り込まれている。

このアワミムスリム連盟には、スフラワルディーらの東ベンガルの有力政治家が参加していたが、当初は、政党といってもムスリム連盟に反対する政治家の寄り合い所帯の性格が強く、大衆的な基盤を持つ組織政党と言うよりは、それぞれの主張を網羅した綱領による政治家の連合という性格が強かった。

アワミムスリム連盟が、その基盤を広げ、東ベンガル住民の支持を得ていくのは、1950年の憲法基本原則委員会第一次報告に対する反対運動と、1952年の言語運動だった。憲法基本原則委員会がその第一次報告の中で提案した基本原則では、ベンガル語の国語化の希望は無視され、人口比による議席配分は認められず、人口において多数を占める東パキスタンが制度的に不利な地位に置かれていた。アワミムスリム連盟を中心とする勢力は、これに対して1950年11月に州民会議を開き、代案としてラホール決議に基づく独自の三層構造の連邦制をとる「パキスタン合衆国」構想を

打ち出した。<sup>(24)</sup>1952年の言語運動においては、学生運動を政党レベルで支援する行動委員会が組織され、バジャニはその議長となる。学生に対する警官の発砲により犠牲者が出て、この運動は一般市民にも支持を広げ、中央政府に対する東ベンガル住民の不信は決定的なものとなった。

アワミムスリム連盟がこれらの運動を通じて、東ベンガル住民の間にその支持基盤を拡大して行く過程では、大衆運動の組織者としてのバジャニの経験と実力が大きな役割を果たしたことは間違いない。1952年には、それまで地下活動が続けてきた共産党が、その戦線を大衆の支持獲得に広げるために、アワミムスリム連盟の戦列に参加する。これも、バジャニを始めとするアワミムスリム連盟の大衆への浸透力と、その不満と希望を代表する吸引力の強さのひとつの証と見るのでないだろうか。

総裁としてのバジャニの、アワミムスリム連盟の支持拡大のための考慮は、その世俗化をめぐる動きの中にも見出すことができる。党名からムスリムをはずし、アワミ連盟という宗教に基づかない世俗政党に党の性格を変更することは、1953年7月の党評議会で、モウラナの称号を持つバジャニ自身が積極的に取り上げた課題であった。このとき世俗化に反対したのは、世俗の政治家のスフラワルディー<sup>(25)</sup>であった。この対照は、党の性格を大きく変更することでこれまでの支持者を失うことを恐れる世俗の政治家スフラワルディーの現実的な考慮と、宗教の垣根を越えた多様な人々が団結することによってより民主的な基盤を築いてムスリム連盟政府に反対する勢力を拡大しようとする、宗教指導者バジャニのもうひとつの現実的な考慮の対照を見せて興味深い。

#### (2)統一戦線の勝利と21項目要求

アワミ連盟を中心にした、ムスリム連盟に対抗する勢力の結集の動きは、1953年末の統一戦線の結成と、翌年の州議会選挙における

その圧倒的な勝利でひとつの頂点に達する。議席総数309のうち、統一戦線はムスリム議席237の94%にあたる223議席を獲得し、このうちアワミ連盟は143議席を占めた。これによって、東パキスタンにおけるムスリム連盟の覇権は終わりを告げた。

統一戦線は、アワミ連盟とフォズルル・ハクの農民大衆党、その他の2政党によって構成されていた。その綱領は、21項目の要求としてまとめられ、その中には①ベンガル語の国語化、②国防・外交・通貨を除いたすべての権限を持つ完全州自治、③直接選挙による制憲議会の改選、④地主制の無償廃止、⑤ジュート産業の国有化、⑥外貨収入の配分における東西パキスタンの格差撤廃、等が含まれていた。バシャニはこの綱領の作成において、1940年のラホール決議の継承と非同盟外交を含めることを主張したが、前者のみが取り入れられた。

これら21項目の綱領が、実現への道を歩み始めるのは、ハクが首班となった統一戦線政府が短命で倒れた後、1956年9月、スワラワルディーが中央政府の首相となって中央と地方の両方の政権をアワミ連盟が占めるにいたってからである。しかし、また、アワミ連盟がパキスタンにおいて政権について1956年から1957年までの一年余は、この政党の限界と本質が照らし出され、バシャニがそれに対抗して独自の道を歩み始めるときでもあった。

政権についてアワミ連盟が、緊急に取り組まなければならなかったのは、食糧問題であった。西パキスタンに偏重した工業化政策のもとで、農業中心の産業構造のままにとどめ置かれていた東パキスタンでは、農業の生産性は低いままにとどまっていた。また、主要な輸出品であるジュートによる外貨収入も西の工業化のために搾取され、住民の購買力は低かった。1955年に凶作に見舞われてからは、食糧不足は恒常的な現象となり、飢饉の恐れが高まった。このような飢饉の恒常化の背景

には、穀物価格の上昇を見込んだ地主・富農による売り惜しみがある。生産性の停滞と、飢饉の出現の根本には、農村における不平等な土地分配の問題があったのである。

21項目の綱領の中では、地主制の無償廃止が、土地改革の政策として挙げられていた。アワミ連盟政府は、この政策の実施を目指したが、補償なしの土地収用を禁ずる1956年憲法に妨げられ、実質的な土地改革は行われなかった。また、土地所有の上限制限もアワミ連盟の主要な支持基盤となっていた地主層の反発を招き、徹底できなかった。小作権の保護については、インドの西ベンガル州のテバガ法にあたる立法が期待されたが、これも実現されなかった。他の社会経済政策においては、1956年の憲法によってベンガル語が国語として認められ、教育制度の改革が進められた。また、東における産業の振興が図られ、鉄道・内水面交通等のインフラ整備が行われたが、ジュート産業の国有化はできなかった。アワミ連盟政権の1年余の成果は、21項目綱領の部分的実施にとどまった。さらに、政権末期には、公職について政党指導部による汚職・腐敗によりアワミ連盟に対する不信が高まる。

(3)アワミ連盟分裂—2つのナショナリズム  
バシャニは、1956年8月に食糧危機への対策を訴えるハンガーストライキを含めた大衆行動を組織して前内閣の退陣を導き、アワミ連盟政権誕生の契機を作り出したが、1957年に脱党するまで、政権内部の一員となることはなく、閣外、院外にとどまったまま与党総裁として政府に対する批判を展開した。政府の食糧危機への有効な対策の遅れを批判し、土地改革の実質的な骨抜きを指摘し、産業振興政策においては外資の導入に反対した<sup>(28)</sup>。アワミ連盟を分裂させた、1957年のバシャニの全国アワミ党設立は、アワミ連盟が政権にあるまさにその時に行われたのである。

野党として野にあって時の政権と対決して

いる間は目立たなかったアワミ連盟内部の亀裂—バシャニを代表とする左翼と、スフラワルディー、ムジブル・ラフマンらの右翼の対立—は、政権につくことにより、大きく浮かび上がってきた。そして、この2つの勢力は、また、東パキスタンにおいて成長し、後のバングラデシュ独立に結びつく、2つの異なるナショナリズムをも代表していた。

Nair, Mallick, Husain らの所論に従ってこの2つのナショナリズムの特徴を概観してみよう。<sup>(27)</sup>

スフラワルディー、ムジブル・ラフマンらは、東パキスタンに新しく生まれつつあった中産階級の利益を代表していた。農村に基盤を置きつつ都市に進出してきた富裕層、官僚階梯における上昇を望む下級官吏、ビジネス界への進出を望む新興企業家層等がその支持基盤であり、これらの人々は政権に近づくことにより、政府の資源にアクセスすることを目指していた。近代的教育を受けた社会のエリート層によって支持されるこのナショナリズムの伝統をエリートナショナリズムと呼ぶ。

これに対して、バシャニが代表していたのは、農村に基盤を置く人民主義的なナショナリズムである。これは、農村に住む貧農の不満と希望を体現していた。この伝統は革命的な現状変革を求めて止まず、政党は社会・政治的変革のための道具として捉えられる。運動の形態においても、議会における議会人の活動より、大衆組織による大衆運動に重点がおかれる。急速な社会変革を求める学生組織もこの人民主義的ナショナリズムを支持していた。

Nairによれば、当時のアワミ連盟指導部のなかで、農民組織での活動経験があったのはバシャニのみであり、農民・労働者層におけるアワミ連盟の組織的基盤は弱かった。Nairはまた、アワミ連盟指導部の多くは、小都市の下級官吏、弁護士、商人、教師の出身であり、これらの人々は農村においても村

の人口の一割前後を占める7.5エーカー以上の土地を所有する富裕層であったことを明らかにしている。

アワミ連盟においては、その設立の当初から、エリート層の影響力が強かったが、政策やプログラムの形成にあたっては、人民主義的伝統も影響力を発揮し、政党の外見は、進歩的でラジカルな衣をまとっていた。しかしながら、政権につきその政策を実施する段階にいたって、この2つのナショナリズムの対立は明らかなものとなる。人民主義の支持者は、政策綱領に示されたプログラムの即時実施を求めるがエリート派はそれに合意しない。当時のアワミ連盟の内紛は、権力の配分を巡るものというよりは、権力行使の目的—政治共同体のヴィジョン—をめぐるのであり、それはまた、後のバングラデシュ独立に結びつく2つの異なるナショナリズムの争いでもあった。

具体的にはバシャニとスフラワルディーの対立は、パキスタンの外交政策と、1956年憲法の評価をめぐって先鋭化する。アメリカ合衆国との軍事同盟を擁護するスフラワルディーに対して、バシャニは、非同盟外交を主張する。また、1956年憲法によって98%の自治は認められたとするスフラワルディーに対し、バシャニは、通貨・外交・防衛の権限のみを中央に残した完全自治の実施を要求する。バシャニが、総裁としての地位を返上し、アワミ連盟を去ることにより、アワミ連盟はエリート主義的ナショナリズムが支配する政党になる。バシャニに代わって大衆の組織化に才能を発揮したのは、学生時代からバシャニやスフラワルディーと行動を共にして政治活動に生き、アワミ連盟政権にその一角を占めたムジブル・ラフマンであった。<sup>(28)</sup>

1957年7月のバシャニとその支持者28名のアワミ連盟からの離脱により、アワミ連盟は州議会における絶対多数を失い、バシャニの率いる全国アワミ党 (NAP) はキャスティ

ングボートを握る。NAPの綱領は、完全地域自治の実現、非同盟外交、基礎産業の国有化、外国企業の接收、労働組合の強化等の社会主義的プログラムを含むが、議会においては、キャスティングボートを生かし、アワミ連盟政府の政策をチェックして、自らの要求を実現させる戦略を取る。NAPがアワミ連盟政府に示した要求には、上記の綱領のほかに統一戦線時代の21項目要求の完全実施、西パキスタンの単一州解体等がある。西パキスタンの単一州化は、1956年の憲法制定に先だてて行われたが、アワミ連盟は、西パキスタン内の多民族の自決権要求を犠牲にする形で東パキスタンの自治権要求を展開していた<sup>(26)</sup>。これに対してバジャニは、西パキスタン内の少数民族との連帯の上に立つ運動を模索していたと考えられる。

NAPのアワミ連盟からの分裂後、東パキスタンの政局は、多数を握る政党がない状況下で不安定化し、1958年9月には、州議会で乱闘が起こり副議長が死亡するという事態にいたる。こうして、1954年の統一戦線の勝利から始まった、東パキスタンにおける議会政治の短い経験は、1958年のアユーブ・カーンによるクーデターでピリオドを打たれる。1962年に改正官製憲法が施行されるまで、パキスタンは戒厳令下に置かれ、バジャニを含む主な政治家は逮捕され、政党は禁止された。

#### (4)アユーブ・カーン軍事政権

アユーブ・カーンが取り入れた基礎的民主制と1962年の官製憲法は、官僚支配と中央政府の権限強化を図るもので、1956年憲法において実現されていた東西の政治的な均衡を無きものとし、中央政府の権限を大幅に強化した。パキスタン建国以来、地域自治の実現を求め続けてきた東パキスタンの住民にとっては、これは時計の針が無理やり元に戻され、自分たちの獲得した権利が力づくで奪われることに他ならなかった。

アユーブ軍事政権に反対する野党は、1962

年憲法に反対し、政治体制の民主化を求めることを共通の目的として、1962年10月にスワラルディーを中心として国民民主戦線を設立した。これにはバジャニのNAPも加わり、右のジャマテ・イスラミ、ムスリム連盟も参加したが、政党組織の形は取らず、「完全な民主主義」の実現を目指す運動体であった。国民議会選挙と大統領選挙を控えた1964年7月には、ムスリム連盟評議会派、ニザミ・イスラミ、ジャマテ・イスラミ、アワミ連盟そしてバジャニのNAPも加わった5野党の連合が形成された。この政党連合の綱領には、民主的な憲法の制定、パキスタンの体制内での地域自治の実現が含まれている。NAPの元来の主張である西パキスタン単一州への反対、中立外交の実現は、連合形成のために犠牲にされた。

1960年代に、パキスタンの政局の変動に大きな影響を与えたのは、学生を始めとする大衆の政治行動である。基礎的民主制と1962年憲法による統制された民主主義の下で、政党が活動の自由を奪われた一方で、アユーブ体制の下で蓄積した不満は、直接的な民衆の行動の形を取って表明された。ハルタル(ゼネスト)、ゲラオ(包囲行動)等現在のバングラデシュにおいても頻繁に取られる街頭行動の様式は、すでにこの時代に行われていた。最終的にアユーブ体制が倒されたのは、1968年11月にラワールピンディーに始まり、自然発生的にパキスタン各地に広がった反政府大衆暴動であった。

東パキスタンにおいては、アユーブ政権のもとで進められた経済開発政策によっても東西の植民地的経済関係が改善されず、東西経済格差が固定化するにいたったことへの不満が、中産階層の中に蓄積されていた。さらに1965年の第2次印パ戦争においては、東パキスタンは防衛上きわめて不利な地位に置かれ、東パキスタンにとっての永年の希望である州自治の必要性を一層強く自覚させることとなっ

た。1966年のアワミ連盟による6項目綱領は、このような東パキスタン住民、特に実業家・中産階級・学生・知識人の要求を代弁するものだった。

#### (5) 6項目綱領

6項目綱領は、(1)ラホール決議に基づく連邦制と成人普通選挙による議会民主制の実現、(2)連邦政府の権限を国防・外交・通貨に限る、(3)通貨制度は東西両州の自由交換制とするか、別個の準備銀行による資本移転の制限を行う、(4)財政は州にゆだね、連邦政府は国防・外交に必要な資金を確保する、(5)外貨は州が管理し、外国援助・貿易は連邦・州の協議事項とする、(6)州は独自の軍隊が準軍隊を持つ、というもので、それまでの完全州自治の要求を一步進めた内容となっている。アワミ連盟のこの綱領に対し、バジャニのNAPは、西パキスタンの単一州解体を含む12項目要求を掲げたが、NAPはその後中ソ対立のあおりを受けて内部分裂し、求心力を失っていく。パキスタン当局が、6項目綱領を掲げるアワミ連盟のムジブル・ラフマンに厳しい弾圧を加えれば加えるほど6項目綱領とムジブル・ラフマンは、東パキスタンの「抵抗のシンボル」として住民の感情を収斂していった。

#### 4. バングラデシュ独立

1969年、自然発生的な大衆暴動によって崩壊したアユーブ・カーン政権に代わったのは、ヤヒヤー・カーン陸軍総司令官による戒厳令支配であった。ヤヒヤー・カーンは、軍政の暫定的な性格を強調し、1970年10月に国民議会選挙を行うことを発表、各政党は総選挙に向けた選挙運動に入る。当初10月に予定されていた投票日は、8月に東パキスタンを洪水が襲ったため、12月に延期された。さらに11月には、東パキスタン沿岸部を強大なサイクロンが襲い、死者推定50万人という未曾有の被害を出した。

NAPバジャニ派では、リーダーのバジャニ自身は当初、選挙への参加を主張していた

が、パキスタン政府によるサイクロン救援対策の遅れを強く批判し、選挙を延期して救援対策を取ることを要求したが容れられず、結局選挙ボイコットを決めた。また、この時点で、既にNAPバジャニ派の急進派は、階級闘争の優先を主張(M.トーハ派)するか、社会変革とベンガル独立の同時達成を主張(A.マティン・A.アーメド派、ザファール・メノン派)するかに関わらず、武装闘争を主張し、総選挙のボイコットを主張していた。

選挙の結果は、この選挙を6項目綱領への信任投票と主張したアワミ連盟の圧勝に終わる。アユーブ・カーンの10年にも及ぶ強権的支配、それに対する大衆運動、印パ戦争とサイクロンによって示された東パキスタンの疎外状況、これらが、東パキスタン住民の要求を、完全自治から分離へと一步進めていた。この選挙結果を受けてバジャニは1971年の1月に東パキスタンの独立を主張する。

6項目綱領に固執するアワミ連盟とヤヒヤー・カーンの交渉は合意を見出せないまま、3月25日夜パキスタン軍は、武力による東パキスタンの弾圧にのりだし、内戦に突入する。

3月26日チッタゴンのラジオ局からバングラデシュ独立宣言が放送され、翌27日バジャニは、自派勢力に対して抗戦を指示する。アワミ連盟指導部は、臨時政府を組織して、インド領内から解放戦争を指導した。バジャニは、4月21日には国連事務総長、毛沢東中国主席、ニクソン米大統領ら12人の世界の指導者にバングラデシュの独立を承認するよう求める書簡を送り、翌日には、全国民に向けて、武器を取って「鋼鉄のような団結」を形作るよう呼びかけ、世界各国に対し、バングラデシュ独立闘争への支持を求める声明を発表する<sup>(30)</sup>。5月までには、パキスタン軍はほぼ全土を制圧し、戦況はゲリラ戦に移る。バジャニを中心とした急進左派や学生・労働者・農民組織はバングラデシュ解放闘争調整委員会を組織して独立革命を農村革命に結びつけようとする

る。これに対してアワミ連盟の指導部は、左翼勢力に主導権を奪われることを恐れ、臨時政府の諮問機関としてNAPを含む五党の協議会を設ける。独立戦争は、雨季を過ぎて、難民の大量流入とインド国内の急進左派ナクサライトへの影響を恐れるインドが介入して戦況が一転、12月16日にパキスタン軍の降伏により9ヶ月にわたった独立戦争の幕が閉じる。

#### 5. 独立の後で

独立国家としてのバングラデシュの誕生は、それまでに東パキスタンの住民が悩まされていた政治的、社会経済的問題の解決を約束するものではなかった。支配者としての西パキスタン官僚と軍隊は去り、ベンガル人のベンガル人による政府が設立された。しかしながら、それが、どれだけベンガル人大衆のために機能するものであったのかは大きな疑問である。

政権についたアワミ連盟は、社会主義を原則に掲げ、主要産業の国有化、外国資本の接収を進める。1972年4月に召集された制憲議会は、11月4日に「民族主義・社会主義・民主主義・政教分離主義」を国家政策の4原則とするバングラデシュ人民共和国憲法を採択する。1973年3月に行われた総選挙の結果は与党アワミ連盟の圧勝に終わった。9ヶ月にわたった内戦は、バングラデシュの主な社会経済資本を徹底的に破壊し、新生国家は、瀕死の状態から経済的な再生を図るために、外国からの援助に依存した。しかしながら、これらの資源は、国民福祉の向上のためだけでなく、政権に近い人々の私的利益の増大にも用いられた。国有化された企業も、非効率な官僚主義による経営で活動は停滞し、農業生産・流通も停滞したままで、物価の上昇には歯止めがかからず、国民の生活は苦しさを増した。

総選挙で手痛い敗北を喫した野党側も、バシャニのNAPを中心とした統一戦線を組ん

で反政府の運動を強めるが、1974年12月政府は非常事態を宣言、憲法を改正して大統領制をしき、すべての政党を解散して翼賛政党1つに統合する。バシャニもこの時、自宅軟禁状態に置かれていた。独裁化したアワミ連盟政権の命脈を絶ったのは、1975年8月15日の青年将校によるクーデターであった。独立戦争において主要な役割を果たしながら、独立後はアワミ連盟政権から冷遇されてきた軍内部での不満は、その内部での権力闘争とも絡み合って、この年3度のクーデタとなって暴発し、最終的に11月7日、ジアウル・ラフマン陸軍参謀総長が実権を握って軍政がしかれる。

バシャニは、当初このジアウル・ラフマンの政権に対する支持を表明するが、翌年インドとの水利問題においては、国民的利益の擁護を訴えファラッカ堰への大行進を組織する。この大衆行動がバシャニの生涯における最後の大きな活動であった。ファラッカ大行進の6ヶ月後、バシャニは、サントシュで息を引き取る。96歳であった。

#### IV. バシャニとイスラム

バシャニの、約一世紀にも及ぶ生涯における政治生活を支えたものはいったい何だったのでろうか。ここでは、バシャニのイスラム信仰の中にその手がかりを探してみたい。

##### バシャニのラブピヤート

これまでに公刊された唯一のバシャニの伝記の著者であるモクスードは、バシャニの信仰の核心にあって、生涯にわたる政治闘争を支える原理となったのは、ラブピヤートの思想だとしている。以下モクスードに従って、バシャニのラブピヤートの思想を検討してみたい。<sup>(31)</sup>

ラブピヤートの思想とは、コーランの原理と預言者の教えに示された、絶対者の規律である。それによれば、被造物としての人間には果たさなければならない2つの義務がある。

第1の義務は、huqqulah と呼ばれる絶対者に対する義務である。第2の義務は、huqqul-ebad と呼ばれる同類としての人間に対する義務である。すなわちラブピヤートの思想によれば人間は、絶対者に完全に服従するとともに、それとは独立したもうひとつの、同類としての人間に対する世俗の義務を果たさなければならない。このラブピヤートの思想は、絶対者が持つさまざまな属性の中で、創造したものを持続させる者としての属性の現れであるとされる。

バシャニは、イスラムとは人間の生についての普遍的で包括的な理想を示すものであるとしている。現実には、それは支配者の都合にあわせて精神的な領域のみに矮小化されているが、本来イスラムとは、人間の生に関わるすべての問題に革新的な解決を導き出す教えであるという確信を、バシャニは持っていた。興味深いのは、イスラムの理想の普遍性についてのこのような強い確信が、バシャニをして他の宗教に対する優越的な態度や偏狭な見方から遠ざけ、むしろ他宗教との間の溝を狭める方向に働いているということである。

すなわちバシャニによれば、イスラムが人間の生についての普遍的・包括的な理想であるならば、ラブピヤートはもはやある特定の宗教の問題ではなく、人類の普遍的規範に源を持つ自明の真理である。ラブピヤートは、ムスリム・ヒンドゥー・クリスチャンその他の区別を問わずに開かれており、各自がそれぞれの宗教哲学に基づいてそれを学び、精神的発達を遂げて行くことが望まれる教えとされるのである。バシャニのこのような宗教的な寛容の姿勢と、人間の発達能力に対する信頼は、晩年の宗教文化団体 Hukumate Rabbania Society の設立や、サントシュ・イスラム大学の設立に結実する。

絶対者を愛するなら、まず他人を愛せ。他人を慈しむことのできないものに、絶対者の慈悲はない。バシャニがしばしば引用したと

いうこのハディースの言葉は、ラブピヤートの思想の本質を端的に示し、その思想とバシャニにおける政治との結びつきをもまた示しているように思われる。ラブピヤートの思想に従って、宗教・民族の区別なく被抑圧者の悲惨・抑圧・不正義の解消を追求しこの世を行きぬく道と来世の平安を説くことと、社会主義の理想である貧困と搾取のない社会を目指すこととは、こうしてバシャニにおいて強く結びつき得たのである。

## V. 結びにかえて —ラジカルな民主主義者としての モウラナ・バシャニ

バシャニのラブピヤートの思想は、イスラム宗教指導者としてのバシャニにおける、政治との独自の関わり方の根本を明らかにしている。そして、そこに含まれる他宗教への寛容と、政治への世俗的なアプローチのあり方は、原理主義的なイメージ一色に塗りつぶされている今日のイスラム世界認識に大きな疑問を提示するものである。今回の作業では、このバシャニのラブピヤートの思想の特色を他の伝統的宗教指導者との対比において深めることはできなかった。特にパキスタン建国に至るまでの、他のデーオバンド関係者との相克については、より詳細な調査が必要である。また、バシャニにおける暴力の調教の問題もほとんど論ずる事ができなかったが、この問題は、特にバングラデシュの独立に至る政治・軍事関係の問題と関連して独自に検討することが必要である。政治家としてのバシャニの階級的側面については、多少論ずることができたが、さらに深める必要がある。

以上のような残された課題を念頭に置きつつ、本稿を終えるにあたって、政治家としてのバシャニを、ラジカルな民主主義者として捉え直す仮説を提示して、今後の研究への足がかりとしたい。

千葉眞のラジカルデモクラシー論にしたがっ

て、民主主義を、単なる制度や手続きの問題に矮小化するのではなく、その根元に有る、民衆の発意、生活、自発的なネットワークと共同の権力<sup>(32)</sup>に注目するならば、モウラナ・バシャニはつねにこの根元に遡って、民衆のアジェンダを政治の中に注入することを指向した政治家だったといえるのではないだろうか。

ラジカル・デモクラシーの目的は、民主主義の根元にある民衆のアジェンダを公論の光のもとに照らし出すことであり、政党や議会はあくまでもその手段としてある。政党や議会が、この機能を果たし得なくなったときには、常にそれに代わる手段が模索される。バシャニの政治家としての歩みにおける、一見すると大きな揺れにも見える、多様な発言と活動は、この視点から解釈されるのではないだろうか。また、民主主義が歴史的に「いかなる権力の階層性にも懐疑の視点を有し、社会的に脆弱な立場に置かれている人々との連帯を模索してきた」<sup>(33)</sup>ことを考えるとき、バシャニをラジカルな民主主義者として捉えることは、より一層妥当なことと考えられる。

アマルティア・センが経済学者として取り組んだ課題―「総人口のうちわずかな部分しか占めていない人々が飢饉にあったとき、多数決原理に基づく選挙方式や大衆による政府批判の仕組みの中で、それはどのようにして深刻な問題として訴える力を持つ問題になるであろうか」<sup>(34)</sup>―は、バシャニが政治家として、目前の緊急事態への対応として取り組まなければならなかった課題だったのである。貧民の間に広がる飢餓への対策を訴え、ハンガーストライキを決行し、与党アワミ連盟の総裁でありながら、政権の食糧対策とその根元にある問題としての土地改革の遅れを批判する時、またサイクロンによる離島・沿岸地帯の住民の壊滅的な被害を前にして選挙よりも救援を優先することを訴える時、バシャニは、センの言葉を借りれば、「民主主義の手段的価値」―統治者に国民の必要に応じて積

極的に行動を起こさせるようなインセンティブ<sup>(35)</sup>を与える―を徹底して追求していたといえるだろう。

他者の困窮状態を理解し、行動を起こす人間の倫理性を動かせるためには、価値観を形成する過程としての公共的議論や、公開対話の役割―アマルティア・センの言う「民主主義の構築的価値」<sup>(36)</sup>が欠かせない。バシャニがその政治家としての生涯をかけて求め続けたのは、このような民主主義の構築的価値の実現だったのではないだろうか。公共的議論の力は、制度としての民主主義の枠内だけで働くのではなく、「議論の場を拡大することで民主主義が機能する枠そのものを広げること<sup>(37)</sup>」のである。

このような、ラジカルな民主主義が効果的に機能するためには、民衆に対して社会的機会が十分に提供されなければならない。ラブピヤートの思想を基本としつつ、実用教育に力を置いたサントシュ・イスラム大学の設立は、民主主義を持続可能なものとする環境・条件を整備するためのバシャニによる具体的な活動であったように思われる。

バシャニをラジカルな民主主義者と考えるとき、バシャニがその生涯において関わった2つの政治社会の独立、1947年のパキスタン独立と、1971年のバングラデシュ独立は、バシャニにおいて、いったいどんな意味を持ったと考えられるだろうか。2つの独立後のそれぞれの政体におけるバシャニの政治家としての歩みを振り返ると、これら2つの独立とも、バシャニが追求したような民主主義の実現に成功したとは到底言いがたい。持続可能な民主主義への道は、その原理の徹底によって開かれるのではないだろうか。この意味において、バシャニの夢は、いまだその実現の途上にあるといえよう。

(本稿を終えるにあたり、バングラデシュでの調査にご協力いただいた、ダッカ大学歴史



学部メスバ・カマル教授、アーマド・カマル教授、政治学部アタウル・ラフマン教授に心より感謝いたします)

〔注〕

- (1) たとえば、インド人の視点から書かれたインド近代史で、サバルタン・スタディーの嚆矢ともなった、スミット・サルカール『新しいインド近代史Ⅰ・Ⅱ下からの歴史の試み』(1993研文出版)。
- (2) たとえばパキスタン時代の官僚として、分離・独立の政治過程を描いた、Hasan Zaheer “*The Separation of East Pakistan*” (1994 Oxford University Press)
- (3) 日本におけるバングラデシュの現代政治研究については、佐藤宏氏をはじめとするアジア経済研究所の蓄積がある。(佐藤宏編『南アジア現代史と国民統合』アジア経済研究所研究双書366,1988年、同編『バングラデシュ:低開発の政治構造』同双書393,1990年等)また、インド亜大陸の政治家研究としては、ガンジー、ネルーらについてはその著作が邦訳され、その他のインド・パキスタン分離独立期の政治家たちについても研究が積み重ねられてきている。(蠅山芳郎『ガンジー、ネルー』世界の名著77,1980、長崎暢子『インド独立—逆光の中のチャンドラ・ボース』1989、『ガンディー—反近代の実験』1996等)
- しかしながら、バングラデシュの独立に関わった政治家個人々々についての研究は、これまでほとんど行われていない。本稿は、この点で、バングラデシュの現代政治を、それに関わった個人の人と思想を通じて読み解こうとする、新たなアプローチの試行でもある。バシャニ個人についての伝記的研究は、現在までのところ邦語・英語資料には見当たらない、ベンガル語ではジャーナリストのサイド・アブル・モクスード

による伝記が、1994年にバングラアカデミーから出版されている。

- (4) Syed Abul Maksud, “*Maulana Bhasani : His Philosophy of Rabubiyat*” (mimeo, 1997)
- (5) 冒頭の5名の場合は、フォズルル・ハクを除きロンドンで法律家となるための訓練を受けている。フォズルル・ハクの場合も法律学を学んでいるが、場所はカルカッタである。
- (6) この神学校は、現在でもムスリム世界においてエジプトのアズハル大学に次ぐ名声を博しており、インド・パキスタン・バングラデシュはもとより、アフリカや他の第三世界の諸国から学生たちが学んでいる。
- (7) 加賀谷・浜口『南アジア現代史Ⅱ』p.97
- (8) 第1次大戦中、第4代校長のマフマドゥール・ハサンは、イギリス帝国主義に反対するムスリムの国際的連帯と、トルコのキラーファト(カリフ制)擁護を訴え、反英蜂起を準備していた。(加賀谷・浜口前掲書 p.99)
- (9) これらの建物は現在、バシャニが設立したサントシュイスラム大学の中の記念館に、保存されている。
- (10) *Holiday*, 15 October 1972.
- (11) バシャニの高弟の1人 Syed Irfanul Bari 氏とのインタビュー(1999年3月)
- (12) 平凡社『イスラム事典』p.86
- (13) 前掲 スミット・サルカール『新しいインド近代史Ⅱ下からの歴史の試み』p.434
- (14) Bimal J. Dev and Dilip Kumar Lahiri “*Assam in the days of Bhasani and League politics*” *Journal of Asiatic society of Bangladesh*, Vol. XXIV—VI 1979—1981
- (15) 平凡社『南アジアを知る事典』P.263—264
- (16) バシャニが実現しようとした教育の特徴は、その晩年にみずからが創立した、サン

トシュ・イスラム大学の教育内容に体现されている。この大学は、小学校から高校、大学までもふくむ総合教育機関である。その建学の理念は次の5つの原則に要約されている。

1. 人類の発展と普遍的な兄弟愛の形成に資する人材の開発。
2. 道徳的、精神的及び物理的な教育（ラビヤートの哲学）
3. 文献を通じた学習と並行して、実用技術を習得する。
4. 学術的な研究と実用的・物理的作業を組み合わせる。
5. 生徒と教師が日用品の生産に従事する。

教育内容においては、イスラム研究が1つの学部において専門的に進められるものの、その他の学部においては、問題発見・解決を重視する実用的な知識技術の習得が目指されている。大学の名称にイスラムが含まれているが、その教育は宗教の違いに関わらず、すべての学ぶものに対して開かれている。(Santosh Islamic University - Aims, Objectives Structure, mimeoによる)

(17) Holiday, 15 October 1972.

(18) 加賀谷・浜口前掲書p.74

(19) シャー・フリウッラーの社会思想は、加賀谷寛氏(同上書p.37-38)によれば、次のような内容である。

「かれの社会理論の基本は『人間の幸福論』であり、倫理学・政治学は幸福達成の技術とされる。そこでの“人間”は、ムスリムだけでなく普遍的な人間のことである。そして人間は本性として“幸福”を追求するものと考えられ、その本性が肯定される。衣食住の充足、性の満足、利を求め損害を避ける行為の肯定である。またアリストテレスが人間を“ボリス的動物”と規定したように、かれは人間を“社会的動物”とみなした。そこでの“善き社会”とは全体の利益の原理に

立つ社会であり、このような原理に合致したときにはじめて個人も善となる。」この人間の幸福を追求する本性から、抵抗権も承認される。

「このような人間の本性の発展を阻止するような力は排除されなければならない。人間の本性が外的(物質的)・内的(精神的)な力によって歪められずに発展できることが幸福達成の条件なのだからである。また善き社会の原理に反して、権力者が利己的動機に動かされるとき、その社会は“悪しき国家”となる。社会内にこうした欠陥が生じた場合、これを除去しなければならない。これは悪しき権力は妥当して善いという抵抗権の承認に至る。」

(20) フェライジー運動の内容については、前掲加賀谷・浜口p.45-48を参照した。

(21) Bimal J. Dev and Dilip Kumar Lahiri, *ibid*

(22) Muhammad Ghulam Kabir “*Changing Face of Nationalism*” p. 100 (University Press Limited 1995)

(23) Taj ul-Islam Hashmi “*Pakistan as a Peasant Utopia*” (Westview 1992)

(24) この構想の詳しい内容と、その画期性については佐藤宏「西パキスタンの統合(1955年)とベンガル-東パキスタン自治権運動の再検討-」(佐藤宏編『南アジアと国民統合』1988)を参照。

(25) N. B. Nair “*Politics in Bangladesh*” p. 78-79 (Northern Book Centre, New Delhi 1990)

(26) 1957年5月13日、東パキスタン州首相でアワミ連盟の指導者でもあるA. R. Khanは、中央政府の首相スフラワルディに、「モウラナ(バシャニ)は、われわれの人生を悲惨なものにしている。彼は、次々と反政府運動を繰り広げ、あらゆる方法でわれわれの信認を奪おうとしている。」と書き送っている。Hasan Zaheer “*The Separation*

- of East Pakistan*" p. 44 (Oxford University Press 1994)
- (27) Nair前掲書および, A.R.Mallick, Syed Anwar Husain "*Political Bases of Bengali Nationalism*" (*History of Bangladesh 1 Political History*, 1992 Asiatic Society of Bangladesh)
- (28) ムジブル・ラフマンは, パキスタン時代のアワミ連盟政権期に, 州政府の産業省, 茶委員会の委員長を務めている。
- (29) 佐藤宏氏は, 前掲論文において東パキスタンの政治指導者の, 西パキスタン単一州化への同意の経過から, 彼らの自治権要求の内実を問うている。
- (30) A. M. A. Muhit "*Bangladesh, Emergence of a Nation*" p.288 (University Press Limited 1992)
- (31) この章の分析は, Syed Abul Maksud, "*Maulana Bhasani : His Philosophy of Rabubiyat*" (mimeo, 1997) をもとにしている。
- (32) 千葉真『ラジカルデモクラシーの地平』 p.21 (1995新評論)
- (33) 同上p.36
- (34) アマーティア・セン「民主主義と社会正義」 (『世界』1999年6月) p.143
- (35) 同上p.131-132
- (36) 同上p.143
- (37) 同上p.146

## モウラナ・バシャニ関係年譜

年月日 (年代)	バシャニ	インド・世界
1880年	バブナ県ダンガラ村に Haji Sharafat Ali を父として生まれる	1885 インド国民会議派成立
1890年代	Sufi Shah Nasiruddin Baghdadi に教えを受け、デーオバンドで、Moulana Hussain Ahmed Madani とともに2年間を過ごす。	1894 青年トルコ党結成
1900年代	反英植民地運動に加わる。	1905 ベンガル分割令布告
1910年代	モウラナ・モハメド・アリとともにキラーフアト運動に加わる。	1906 全インドムスリム連盟結成 1914 -19第一次世界大戦 1919 全インドキラーフアト会議開催 1920 キラーファト会議対英非協力運動を開始 1922 国民会議派、非暴力抵抗運動の中止を決定
1923年	キラーフアト運動退潮期、ベンガル・アッサムの農民運動に向かう。	
1924年	バシャニ・チョールでアッサム・ベンガル小作人大会開催	1925 ベンガルで大衆会議(後の農民大衆党)結成
1930年	ベンガル・アッサムムスリム会議を組織	1930 ガンディー、非暴力非協力抵抗運動を開始 1930.12 ムスリム連盟第12回大会、ムスリム国家を提唱
1931-32年	マイメンシン県の地主への直接行動	
1932年前半	英植民地政府によりマイメンシン県から追放される。	1932 ラフマト・アリーら、パキスタン構想を発表
1932年12月	シラジゴンジで大規模な大衆集会を組織、ザミンダール制の廃止と負債の軽減を要求。	1935 新インド統治法成立、州にインド人自治、北西辺境州、スィンド州誕生
1937年	M.A. ジンナーや、Raja Gujuafar Ali らに請われて、ラクナウ会議直前にムスリム連盟に加入。	1940 ムスリム連盟、ムスリム独立諸国家の独立を目指す、ラホール決議を採択 1946.4.9 ムスリム連盟、単一のパキスタンの樹立をめざすデリー決議を採択 1946.8.16 パキスタン樹立のための直接行動によりコミューナルな暴動発生
1947.5.7	ムスリム連盟の組織的決定を待たず、非暴力・非宗派主義を掲げて、市民的不服従運動を開始。	1947.8.14 パキスタン独立
1947年	シレット直接投票で、シレットのパキスタン帰属に貢献	1948.2.26 ムスリム連盟評議会新規約採択
1948年	東パキスタン議会選挙に、北タンガイルから立候補、無投票で当選。しかし、3ヶ月後にムスリム連盟政府を批判して辞任	1948.3.19 第1次ベンガル語国語化運動 1949.3.12 制憲議会、憲法目標決議を採択、憲法基本原則委員会を設置
1949.6.23	アワミ(人民)ムスリム連盟を結成。パキスタン最初の野党総裁となる。	1950.9 基本原則委員会、第1次報告発表 1950.11.4 東ベンガル州民会議、東西パキスタン自治政府からなるパキスタン合衆国を要求

年月日 (年代)	バシヤニ	パキスタン・世界
1951.1	基本原則委員会報告への反対運動展開	
1952.1.30	全党合同ベンガル語公用語化行動委員会委員長となる	1952.1.26 ナジムッディン, ウルドゥー語国語化演説 2.21 ベンガル語国語化運動で死者 12. 第2次憲法草案, 制憲議会に提出
1953.7	党評議会で世俗化問題を議論	1953.12 アワミムスリム連盟, F.ハクの農民労働者党と統一戦線結成
1954.4.5	世俗化承認, 党名称をアワミ連盟に改称	1954.3 州議会選挙で統一戦線圧勝 4 統一戦線州政府成立 5.30 グラーム総督, 州政府を解任し, 知事統治をしく
1954.10	世界平和会議出席のため外遊	10.24 グラーム総督, 非常事態宣言制憲議会を解散, 野党指導者を逮捕 ムハンマド・アリ・ボグラ内閣にスフラワルディ入閣
1955.6	東ベンガル州政府組閣をめぐって, アワミ連盟統一戦線から離脱	1955.6.21 第二次制憲議会選挙 9.30 西パキスタン諸州を単一州に
1956.8	政府の食料政策に抗議してハンガースト	1956.2. パキスタン憲法採択 3.23 施行
1957	Krishak Samity(農民組合)結成, 総裁となる	1956.8 東パキスタンで, 食糧事情の悪化に対する抗議行動
1957.2	カグマリ会議で, 完全自治と非同盟外交を主張, 将来の分離の可能性も示唆	1956.9.6 アワミ連盟中心の連立内閣成立
1957.3	アワミ連盟総裁としての辞表提出	
1957.7.24	アワミ連盟脱退	
1957.7.25	全国アワミ党(NAP)結成, 委員長となる	1958.9 東パキスタン州議会で乱闘
1958.10.7	戒厳令布告, 逮捕される	1958.10.7 ミルザー大統領戒厳令布告, アユーブ陸軍総司令官を戒厳総司令官に指名 1959.5 アユーブ大統領行政改革断行を発表 10.27 基礎的民主制令を施行
1962.10	スフラワルデフィの国民民主戦線にNAP参加	1962.4.28 国民議会選挙 6.8 国民議会招集, アユーブ・カーン大統領就任, 戒厳令解除 1962.10 スフラワルディ国民民主戦線結成
1966.12.9	NAP, 州自治・西パキスタン州解体を含む12項目要求を国民議会に提出	1965.9.6 第2次印パ戦争 1966.1 タシケント宣言に調印 1966.3.19 M.ラフマン6項目綱領案作成, アワミ連盟評議会で採択
1967	NAP, 中国よりのバシヤニ派と, ソ連よりのワリー・カーン派に分裂	1967.5 アワミ連盟, 国民民主戦線等でパキスタン民衆運動を組織
1968.12.6	NAPバシヤニ派, ダッカで集会・デモ	1967.5 ブット, パキスタン人民党結成
1969	Pakshiで農民大会, 25万人参加	1968.11 カラチで自然発生的大衆暴動発生 1969.3.25 ヤヒヤ・カーン陸軍総司令官に全権委譲

年月日(年代)	バシャニ	パキスタン・バングラデシュ
1970	各地で農民大会を開催, サントシュ(20万人参加)モヒルプール(30万人参加)	1970.11.12 東パキスタンで未曾有のサイクロン被害, 死者推定50万人。救援対策の遅れに政府への不満たかまる。
1970.12.7	国民議会選挙 NAP バシャニ派はボイコット	12.7 国民議会選挙, アワミ連盟が過半数を占める
1970	サントシュ・イスラム大学設立	1971.1 ヤヒヤー, ラフマン会談 3.1 ヤヒヤー大統領国民議会の開会を延期, 州知事を戒厳司令官に任命 3.15-22 ヤヒヤー, ラフマン会談合意成立せず 3.25 軍の一斉行動で内戦に突入 3.26 ラフマン逮捕, 独立宣言
1971. 3.27	自派勢力に対し, 独立戦争への参加を呼びかけ	4.17 バングラデシュ臨時政府発足
4.21	国連, 中国, 米にバングラデシュ承認を求める書簡送る	5. パキスタン軍全土を制圧, ゲリラ戦へ
4.22	独立戦争への団結呼びかけ	8. インドへの難民200万人(パキスタン政府発表), インド政府は800万人以上と推定
7.5	NAP 含む急進左派でバングラデシュ民族解放闘争調整委員会結成	12.3 インド参戦 第三次印パ戦争 12.16 停戦
1972.4.2	ダッカ大衆集会で, アワミ連盟政府の腐敗を非難	1972.1 ラフマン帰還, 暫定憲法施行
8.25	中国, バングラデシュ国連加盟で拒否権行使。バシャニ, インドのベンガル地域との「大ベンガル構想」を主張	3.26 主要産業国有化と土地改革を発表 4.10 制憲議会開会 8.8 保険会社国有化
9.3	ムジブル・ラフマン首相の辞任と連合政府樹立を要求 ハンガーマーチを呼びかけ, イスラム社会主義を主張	10.31 全国社会党結成 11.4 新憲法採択, 一院制議会, 議院内閣制 12.16 新憲法発効
1973.5	バシャニ断食	1973.3.7 国民議会選挙, アワミ連盟圧勝
12.3	NAP バシャニ派から急進派が離脱, 全国人民解放連合を結成	7.18 ファラッカ堰分水問題交渉インドと合意成立せず
1974.4.16	6野党で統一戦線結成	9.3 非同盟諸国会議に加盟 1974.3.17 全国社会党デモに警官発砲
	この年, Hukumate Rabbania Society 設立,	4.24 ラフマン首相, 武器・麻薬・反社会的行為取り締まりのため軍隊を出動させる
1974.6	自宅軟禁状態に置かれる	7-8 洪水, 食糧危機発生, 餓死者多数。
1975.11.12	バシャニ, 新政権支持を表明	1975.1.25 憲法修正, 大統領制をしき, 単一国民党以外を禁止, 政党指導者の殺害・逮捕相次ぐ
1976.5.16-17	インドと係争中の水利問題でファラッカ堰への大行進を組織	8.15 軍部クーデターでラフマン殺害, 戒厳令
10.1	Khudai Khidmatgar 設立	11.3 ラフマン派巻き返しクーデター 11.7 クーデター失敗, ジア陸軍参謀総長全権掌握
11.13	ダルバル・ホールで最後の演説	1976.1 国有企業民間へ払い下げ, ジュート輸出業を民間に解放
11.17	バシャニ死去	8.25 ファラッカ堰問題を国連に提訴

(加賀谷・浜口『南アジア現代史Ⅱ』, “A Short Life Sketch of Maulana Bhasani”(mimeo)等を元に作製)